逗子の大杉

中濱鐵

日時。 一九二二年四月中旬の或る黄昏前。

人物。 大杉　榮。
電燈工夫、(實はT)。
其筋の人々。

場所。 湘南逗子、大杉の寓居。

情景。 驛から南へ三四丁、濱邊へ下るダラ〳〵阪に沿ふて、重きな冠木門を抱いた人造石の高塀越しに、滿開の八重櫻が白雲の如く柵引き浮んでゐる。可成りに凝つた和洋折衷の屋の棟が高く聳にてゐる 門の扉は内側に半開きになつてゐる。門前は街道を隔てゝ鐵道線路まで青々とした野菜畑が擴がつてゐる。畑の中には見張りの堀立小屋が在る。町の方からは太鼓の音や馬鹿囃子の動搖めきが微かに傳つて來る。濱邊では時々花火が昇つてゐる。天氣全く快晴

門前の街路上

(停車場の方から電燈工夫登場)

二十五六の嚴丈な骨組みの男。赭茶燒けた紺の作業服は所々少さな破れ目を見せてゐる。上衣のボタンも滿足に附いてはゐない。卷ゲートルに黑ゴムの短靴、垢の素足が覗いてゐる。埃まみれのズックの雜囊を左の怒り肩から重さうにブラ下げてゐる。大分疲れた足調である。上衣のポケットから抓み出した手帳を開いて門柱の標札に近寄る。看較べる——

月刊雜誌『勞働運動』編輯所と書かれた小さな看板の下に張り附けてある一葉の名刺、たつた三字大杉榮と極めて細かく浮んでゐる。一瞬鋭く彼の瞳が耀く、點首く、視上げる——五秒——十秒、無字の軒燈を睨んでゐる。四邊を視廻した兩眼は再び頭上の軒燈へ返る——五秒十秒再び點首く。嘘て門を潛ると思ひの外、彼は踵を返して路上に突つ立ち首を傾けながら天を仰ぐ。煤けた鳥打帽の庇をグッと持ち上げる額は横一文字に赤紫の線を引いて汗ばんでゐる。頰骨の失つた肌目の荒い顏面は日に焦げて眞黑に近い。その中から大きな兩眼ば底深くギョロ〳〵と光つてゐる。脂垢の滲んだホックのない裸がつた詰襟が午後の太陽に氣味惡くキラ〳〵と煌く。

(見張小屋から先を爭つて飛び出して來た洋服の男四人、怒鳴りながら彼を追つ捕り圍む。)

洋服の男一。おい！　貴樣はなんだ？　先刻から其處で一體何をしてゐんだ？

(捕り圍まれた男は一足下ると、一瞬、鋭い癖のある兩眼が光る。直ぐ一寸吃驚した態で待つてゐましたと言はゐばかりに微笑みながら)

洋服の男二。僕は其筋の者だ！　此の家を見張つてゐるのだ！

(電燈工夫一寸低頭しながら)

電燈工夫。あゝ、左樣ですか。誰か此の家に惡い奴が今這入り込んでゐるのですかい？

其筋の三。そんなことはお前は知らなくともいゝ。だが何故此處で迂路々々してゐるんだ？　あん？

電燈工夫。軒燈を試驗しやうと思つたのですが相憎く足場が駄目なもんですから困つてゐるんです。椅子か何か踏臺になる物がありましたら一寸貸して戴けませんでしやうか？』

其筋の四。なァんだい！　電燈屋か？　圖々しい奴だなァ。家に入つて何か借りて來たらいゝぢやないか？

電燈工夫。這入つたり出たり、面倒臭いもんですからついずるを定め込んで考へてゐたんですよ。

其筋の四。何を言つてゐるんだ此奴が！

其筋の一。全く圖々しい奴だ！

其筋の三。馬鹿にしてやがるァ！

(三人は小屋へ引き上げる。)

其筋の二。然し電燈屋！　昨晩もこの軒燈は消えてはゐなかつたぜ！　俺達は徹夜でこいつを睨めつこをしてゐたんだから良

く知つてるア。』

電燈工夫。さうですか？　此家は大杉つてお宅でしやう？　ごうも二三日前から電燈が消えていかぬ、一應視に來てくれつて事務所へ通知があつたものですから遣つて來たのです。旦那がさう被口られるのなら大丈夫でせうがそれにしても一應は――。

雜嚢を開きかゝると其筋の二。輕く押さゑて止める。

其筋の二。大丈夫だよ！　これは俺が保障するア！　それなら屹度家の中の電燈に故障があるんだよ。早く入つて往きな。

電燈工夫。さうですか、旦那がそれ程にまで言はれるのならぢやアこいつはおつぽかしやせう。……　……下がお出でになつたのはお芽出度いこつですが、電力をイルミネエションの方に使ふもんですから、彼方でも此方でも電燈の故障だらけで屁古垂れますア。お蔭で他人樣が休んで樂んで祝ひしてるのに此方徒等はこの仕末なんです。世の中のことは萬事が旨く行くつてことはありませんね。それにしても夜明かしだなんて旦那方も甚くお忙しいんですわね？

其筋の二。うん！　此の家はそれや厄介な奴なんだ。……　……

お相互樣だ！　お前もさう愚痴すなよ。

電燈工夫。　？

其筋の二。　！

電燈工夫。あア。さうでしたね。一體この家は何なんですか？

其筋の二。お前は新米と見えるなア。大杉つて有名な無政府主義者の居る家さ。

電燈工夫。無政府主義者つて？

其筋の二。さうか、解らんか？　お前のやうな善良な勞働者には教へてやつても害にはなるまい。無政府主義者つてね、こんなお芽出度い日にだつて旗一本さへ表へ立てやうともしない不逞々々しい奴のこつさ。兎に角、おつかない惡い奴さア。

電燈工夫。へえ！　そんなにおつかないんですか？　困りましたね。中に入つても大丈夫でしやうか？

其筋の二。それや大丈夫さ。何もお前を獲つて喰はうことはしやしないよ。唯、國家の危險人物さ！

電燈工夫。へえ！　さうですかね。然し、太した者ですね――。

其筋の二。何故？

電燈工夫。何故つて旦那方に夜晝見張りをさせるなんて――。

其筋の二。なアに、それや我々だつて職務だから仕方なくやつてるのさ。

電燈工夫。へえ！　有難うございました。では一寸行つて來ますア。

其筋の二。おい！　一寸待て！　一寸頼まれてくれないか？

電燈工夫。何をですか？

其筋の二。今ね此の家に夫婦者のお客が來てるんだ。奴等がごんな會話をしてるるか聞いて來てくれないか？

電燈工夫。誰が來てるんですか？

其筋の二。お前は知るまいが矢ッ張り彼奴等の仲間で王つていふ夫婦者なんだ！

電燈工夫。へえ！　然しそれやごうも困りますね。ごうせ應接間か奥の御座敷でしやうから私の出られる幕ぢやありますまいよ、ふつふふ――。

其筋の二。なアに。お前なら大丈夫だよ。ごの部屋にだつて這入れるぢやないか？電燈の點いてない部屋は一つだつて有るまいから。

電燈工夫。それや。さうですけれごまさか私の居る前で大切なお話でもありますまい。又何を話してるたつて此方徒等にや皆目解りやしませんよ。

其筋の二。會話が聞けなけれや、ごの部屋でごんな顔觸れで、ごんな風にしてるるか位は見れるだらう？

電燈工夫。えゝ。それ位は解るでせう。ごうせ天井裏までも這ひ込むんですから。

其筋の二。それだけでも結構さ。是非頼むぜ！　歸りにあの小屋に寄つてくれ。待つてるからなア。

電燈工夫。後で面倒になるやうなことはありますまいね？

其筋の二。それや大丈夫さ。俺達が附いてるのだもの、心配ないよ。へゝへへ――。

電燈工夫。それさえ無きや。へえ、では往つて來ますア。

其筋の二。頼むぞ！　旨くやつてくれ！

其筋の二、電燈工夫の肩を輕く叩く、電燈工夫クルリと後を向いて、ニタリと笑ひ門を潛つて西側の臺所口の方へ足を惹きづつて行く。その後姿が消えるまで其筋の二、犬のやうに突つ立つて狐のやうな眼差しで追つてゐる柔かな濱風に櫻の花片が三つ四つ舞ひ落ちる。彼もニヤリと笑んで見張小屋の方へチヨコ〳〵走る。

奥の間

四疊半。

東側綠色の砂壁、開閉扉で書齋へ通じてゐる。壁の中央には土耳古頭巾を横つちよに載せた凄壯だが愛嬌のあるバクウニンの肖像額が部屋中を看視してゐる。

西。南側共に硝子障子、外は廻廊・庭、高塀、硝子障子を通して夕陽が部屋の三分の一を影つてゐる。

北側。襖で中の間と隔てゝゐる。此處から臺所の方へ通じるのである。

大杉は裕衣の褞袍を無動作に引つ掛け壁に靠れて、先刻の電燈工夫、實はTと長火鉢を中に兩人とも胡座をかいて對向つてゐる。

T。素晴らしい家ぢやないか？

大杉。うん！　俺の所有ならさうも言へるが、天下の製茶成金、大谷嘉兵衛の別莊こしちや隨分ケチ臭ひ建て方をしてるぜ！

而も奴さん！　これで妾宅を兼ねてゐたんだつて言ふからなア。はゝひゝふゝふふ——。

T。金持つていふ奴は、金こ女にかけちや何處までも抜け目のない算段をする奴等なんだらう？

大杉。彼奴等は悉皆さうしたものさ。（間）。それにしても家賃の催促に來ないのは何よりだ。尤も採りに來たつて無い袖は振られぬがこれで小使錢の餘分が有れば拂ふつもりではゐるのさ。それが又四六時中、不足勝ちでお氣の毒なこつさね。はゝひゝ——。

T。如何だか？

大杉。まあア、そんなつまりでゝもゐなけれやア生涯又とこんな家には住めんよ。（間）。然し、君は今日は馬鹿に旨く化け込んだね。色は黑いし、柄はゴツイも、全くトツテツケだ！　だが腕は少々怪しいもんだね？

T。なアに、これで腕だつて滿更らでもないさア。電信隊で三年も……　……からなア。誰の爲めだつたか知らないが、而も支那やシベリヤくんだりまでも出稼ぎに往つて來た腕だ。內線でござれ、外線でござれ、電信電話の工事なら一通りは一寸垢拔けがしてるつもりだ。どんな專門學校たつて三年經てば卒業證書を吳るぢやないか？　ふゝふふ——

大杉。然し、此處は這入る時はさうでもないが、出てからが隨分執つ固いらしいんだ。直ぐあの小屋に引張り込んで越中褌までも脫がされた連中が隨分ゐるんだ。餘ッ程氣を附けなくちや。それに此頃は何處かの　……　……

……　……。

T。うん！　それが五月蠅いから餘程考へたんだ。それで出る時を淡白りやつてのけるつもりで、這入る時に少々氣を揉ませてやつたんだ。出る時は又なんこか成るだらうよ。

兩人は暫時、凝乎と眼と眼で何かを語つてゐる樣。軈て大杉が大きな瞬を火鉢の中の灰の上へ落す——。

大杉。何處まで行く豫定だ？

T。豫定してはゐない。多分、行ける處まで行くだらう——。

大杉。無理をしないやうに最後までも身體だけは大切にしなくちやア。

T。あア、さう思はんこともないが、實は今、自身で自分を持ちアグネているんだ！

大杉。さうか？　然し、チャンスの後頭か禿げてるからつて焦慮つちや猶更ら打つ毀はしになり勝ちなんだ。あれは昔の世迷ひ言さ。俺達は何時でも懷中に毛生液の一瓶位は持つてるの餘裕がなくちや。若しも途中で氣が差して來たら熟く考へ直して見るこつさ。それでも遣るこなつたら何も他の事は考へずに決行するさ

T。あア、今はなんにも頭の中には無い、又考へ度くもない。兎に角、早く鳧をつけたいこいふ希望たけだ！

大杉。KのE夫婦が來てるんだがそれこなく逢つて往くか？

T。知つてる。何をしに來てるんだ。

大杉。飜譯物の打合せ方々遊びに來てるのだ。如何する？

T。先刻から考へてるのだ。あの人達にも隨分今まで厄介になつてるから會つて往きたい氣もするのだが今又切りに會はない方がいゝ樣な氣がしてゐるんだ。

大杉。それでは俺の女房には？

T。あア、矢御り同じ樣な氣がしてゐる。
大杉。さうか。その方が結句い、。俺獨りの胸に疊んで置かう。
T。あア、さうしてくれ給へ。
大杉。少しは持つてるのかい？
（大杉は人差指を圓く曲げて突き出す。）
T。うん！　少しは持つてる。
大杉。少しばかりでは駄目だぞ！　どんなことに出つかして要る場合が起つて來ぬとも限らんから。（間）。
まてよ、女房の財布の殘り高も見えてるし、Eに云つたつて今の場合如何にもなるまい。斯うつと、斯うしやう、月末に人ることになつてゐる原稿料を前取りすることにしやう。これを汽車賃にして一應東京に逆戻りするんだね。今、名刺に一筆書くから、一寸待つてくれ！
T。あア！。
大杉は長火鉢の引斗から碁口を取り出して疊の上にすつかりぶちまける。むつくり起つて書齋へ入る。Tはゲシャ〳〵になつた紙幣や散らばつてる銀貨や銅貨を數へもせずに無動作にズボンのポケットに捻ぢ込む。應接室からは男女の笑ひ聲に續いて竈子がババアを求むめる無邪氣な可愛い、聲が聞ゐて來る。書齋からは大杉が語尾のはつきりした親しみ深い聲でそれに答へてゐる。エアシップを吹かしながら壁のバクウニンを凝視めてゐるTの兩眼から四粒五粒露の玉が光つて黑い頰を轉げ落ちる。止めやうと努めれば尙湧いて來る。軈て大杉が出て來て名刺を一枚Tに渡して元の席に腰を下ろすTは裏返して見る。たつた一つ認印が捺さつてゐるだけである。
T。これを如何すればい、の？
大杉。先方がゴテ〳〵云ふ所ぢやないのだから、愁つかゴタ〳〵書くよりも何も書かない方がい、と思つたからさ。それで、俺の所に〇〇圓やることになつてゐるさうだから其中いくらか呉れろつて要るだけ持つて行つたらい、だらう。悉皆でもかまはないぜ！　で、受取つた高をそれに書いて渡して置いてくれ、ばい、。グズ〳〵云ふことはないだらうと思ふが、若し、話が旨く行かなかつたらすぐ其の場で俺の所へ電報を打たせろ！　だが大底大丈夫だよ。
T。有難う！　ぢやこれで當分お別れだア。

大杉。一緒に晩餐を喰ひたいのだが遲くなるからそれも出來ぬね。一寸待つて！彼方でもうあれが出來てるかも知れぬ。
大杉は襖を開けて中の間に消ゐる。Tは名刺を少さく圓めてサルマタの紐穴にうまく收ひ込む。大杉が大コップにアイスクリームを山盛りにして匙を二本突き差したのを持つて現はれる。
大杉。さあ！　二人で掬はう！
T。珍らしいものが有るね。
コップを長火鉢の揚臺の上に置いて兩人は交互に双方から掬つて口へ運ぶ。
大杉。うん！家にゐるMがね。夏になつたら此處の海水浴場でこれを賣つて避暑に來たブル連からウンと搾つてやらうつて目論でゐるのさア。それで家にお客がある度に此頃斯うして試驗的にやつてるのだ。もう機械まで買込んで意氣込んでゐるのだが旨く行けばいゝが？　セイ〳〵ブルジョアの汗を搾つてやるのかオチぢやないかつて皆で笑つてるのさ。それにしても甘いだらう？
T。うん！　甘いもんだね。
大杉。奴さん！　何をしても奇用なんだア。
呀ッ！　もう無くなつちやつた。もう一杯持つて來やう。
大杉が起ち上がるのをTは引き止める。
T。もう結構だ！　有難う！　俺はもう行く。
Tは起ち上つて身繕ひを整へる。
大杉。さうかア。多分大丈夫だらうが表で若しものことがあつたら、奴等を蹴つ飛ばして戻つて來るがい、。又、それが出來なかつた場合には何かで合圖をするがい、。此方から直く出掛けて行つて何とかするから。（間）。暮れて塀を乘り越えて出るのもい、が、裏には四ッ足の本モノの犬が三匹も放し飼ひしてるのだ。何でも此處の別莊の連中が悉皆で相談して俺を追拂ふ爲めに土佐犬の凄い奴を撰つてね二足獸の犬共に寄附してやつたんださうだ。其奴が直ぐ喚き立て、飛びかゝつて來るんだ。先達も或る男がそれで到頭引つ摑まつちやつたんだ。而も今日は未だ晝間だしそれに何も擔ぐわけぢやないが、そんな夜這ひみたいな不景氣な門出は幸先が悪いからね。堂々と乘り出すさ！

T。うん！　成るやうに成らせるんだ！
大杉。さうだ！　石かバンかだ！　遣つて見なくちや解らないさァ！
何時の間にか兩人の手はしつかと握り合つてゐる下り列車の汽笛に續いて地響きが壇の上に可成りの震動を波打たせて來る。

見張小屋

五坪程の松板圍ひ、邊か造りの掘立小屋である。南向きで大杉の寓居の門と眞向ひに相對してゐる。街道から十間餘り踏み荒された畦道が入口に通じてゐる不釣合な大きな　兩國の國旗が一間幅の戸口に交差されて揭げられて折柄の濱風に弄られて低い板葺の屋根を輕く撫でゝゐる。小屋の中は字形に區切られ、土間に續いて板の間、東側に一段高く三疊敷が障子に隔てられてゐる。障子の隙間から蒲團の端が見にてゐる。官僚型の八角時計らしいチクタクが障子越しに聞ゑて來る。方二尺位の格子窓が一つ宛四方に開いて在る。小屋の中の空氣はカラ〳〵に乾き切つてゐる。外一面に野菜が植はつて葱の匂ひや、肥料の臭ひが混つて痛く鼻を衝く。鑄鐵の小火鉢が一つ載つてゐる板の圓テーブルを靴履きのまゝ四人が取り圍んで腰掛けてゐる。火鉢の中は吸殼で山盛一杯だ。入口に背を見せてゐるのが先刻の電燈工夫。彼に對してゐるのが其筋の二。其筋の一と三とが東西に陣取つてゐる。三人とも皆、安物の紺の合服を着込んでゐる。三人は申合せたやうに交互に大杉の寓居の門に各自の目を機械的に注ぐことを忘れない。其筋の二、朝日に火を移して口を切る——。
其筋の二。馬鹿に暇取つたね？　四十分もかゝつたぜ！　如何だ？　彼奴等は如何してた？
電燈工夫。それが駄目なんです！
其筋の二。何故？
電燈工夫。何故つて故障が直ぐ見つかつたんですもの。
其筋の二。馬鹿だなァ！　貴樣は！　故障が見つかつても見つからん風をして彼奴等の居る部屋まで行つて見なきゃ駄目ぢやないか？
電燈工夫。え、　さうは考へてゐたのですが何代ろ先方からちやんと、臺所の線が切れかゝつてゐることも、ス井ッチが弛んでゐることも、又このタングスが切れてゐることも悉皆敎へてくれたんですもの。そうしてその他には何處にも故障はないつて言ふんですもの！

其筋の二。さうか。機先を制せられたつていふ譯だね。ぢれ〳〵ぢの電球だ？
電燈工夫、上衣の右ポケットから拾燭光の電球を一個取り出す。其筋の二、それを宙に透かして見る。
其筋の二。うん！　これや切れてる。それでお前は臺所から奥へは一歩も踏み込まなかつたのかい？
電燈工夫。え、、さうなんです。
其筋の二。惜しいことをしたね。折角の好機會だつたのに。誰が出て來たい？
電燈工夫。鼻のデッカイ大きな男でしたよ。そして今流行の水色の襦袢を着てゐましたつけ！
（其筋の三人、顏を見合せてクス〳〵ふ。）
其筋の二。あれや襦袢ぢやないよ。ロシャの百姓が着る——さうだなァ矢ッ張り襦袢かなァ。おつかなかつたらう？　あの男は？
電燈工夫。否！　あれが大杉榮つて人なら旦那方の言はれる樣におつかない人ぢちないですなあ。好い男でさァ。
其筋の二。何故？
電燈工夫。何故つて、面白いオドケばかり云つて、私を笑はせるんですもの、見かけに似合はん優しい男でさァ。それに——
其筋の二。それに何だい？
電燈工夫。なァに、その良く話の解つた男でさァ。
其筋の二。如何してだ？
電燈工夫。電燈屋！　御苦勞だなァ暑いだらうつて、あの人が手製のア井スクリイムの大コップに山盛り一杯おごつてくれたのですもの。へゝへへ——。
其筋の三。呀ッ！　此奴が！
其筋の一。ア井スクリーム一杯でMに買收されやがつたなァ？
其筋の二。道埋で先刻から馬鹿に要領を得なかつたり、又、彼奴を讃めると思つてゐたらこの野郎！　アイスクリームで口止めされやがつたんだなァ。それで讀めた！
電燈工夫。いゝえ！　そんなことはありませんよ。私達は何處へ行つても大底の家では何時でも何か御馳走にあづかりますよ

で慣れつこになつてますからあれ位のことは常り前だと思つてますァ。それにあれだけの屋臺骨を張つてる家ですもの。

其筋の二。よし〳〵解つた。あの男はあそこの食客的だよ！

電燈工夫。へえ！　さうですか？　何代ろ面白い男でしたよ。琉球の女の話なんか聞かせましたよ。そして琉球では電燈屋が馬鹿に女にモテルから遊び方々稼ぎに行けつて眞當でしやうかね？　暢氣な男ですなァあの男は。

其筋の二。あァ　あれや球球人だよ。それにしても隨分手間取つたぢやないか？　もう故障はすつかり直つたのか？

電燈工夫。さうですか、道理で少々ものの言ひぶりが變だと思つた。えゝ、故障の方は立派に直りましたよ。引込線の所が切れ〴〵になつてゐたし。それに捻釘が腐つて拔けてゐたものですからス井ッチが弛んでゐたのです。それとこの電球の取り換えだつたのです。あの人と話しながら仕事をしてゐたものですから自分ぢやそんなに暇取つたとは思ひませんでしたが。

其筋の二。隨分暇取つたよ。あの時は未だ三時半一寸前だつたんだ。それに今はもう四時十五分の下りが通つて了つて、軈て四十四分の上りが來るのだぜ！　ぢやお前はお客や大杉の顏は少しも見なかつたんだね？

電燈工夫。えゝ、洋館の方から時々大人達の哄笑ひや女の子のキィ〳〵聲で歌つてゐるのは聞えて來たんですけれど——。

其筋の二。間抜けだなァお前は。惜しいことをした。其所へ踏み込んで行けばいゝのに。臺所であんな食客的なんかに買收されやがつて、はゝはは。部長殿！　此奴はもう歸しませうか？

（障子の中から睡むさうな其筋の四の聲がそれに答へる。）

其筋の四。ァ井スクリームに買收された罰だ！　其奴の所持品を一應檢べて見ろ！

電燈工夫。困りますなァ、そんなに疑ぐられちや、ふゝふふ。

其筋の三。その雜囊には全體何が入つてゐるのだ？　此所へ出して見ろ！

其筋の三。　板張りに置かれて在る雜囊を取り上げやうとする

其筋の三。馬鹿に重いんだね？　ごれは。

電燈工夫。えゝ、仕事道具ですよ。汚いですからテエブルの上は汚れます。今板張りの上へ打ち開けますァ。

電燈工夫は腰をかゞめて自ら雜囊を開き。中からイギリス、スツバナ、ペンチ、大型の折込みナイフ、赤と黑の撚れ〳〵の束になつた中被

覆線等を列べ擴ける最後に雜囊を逆さに振る。底を擲く。其筋の者三中共中腰になつて見てゐる。

其筋の一。おい！一寸起つて見ろ！　ト衣とズボンのポケットが馬鹿に膨れてゐぢやないか？　何んだ？

電燈工夫起ち上つてポケットの中のものをテエブルの上へ列べ始める。

電燈工夫。捻釘の入つた紙函が二つと、先刻の電球が一つと昨日買つたばかりの新しい手帳が一册と、ズボンの方にはこんなに汚れた手拭が一本と此方のポケットには身代限りの小使のバラ錢がこれだけ有りますァ。ふゝふゝふふ——。

兩足を開いて踏ん張り、兩手を左右に擴げて笑つてゐる電燈工夫に、其筋の三、近寄つて胸から腰へ兩腿へ股倉へまで型式的に兩手を觸れて勿體ぶつた口調で云ふ——

其筋の三。もうよし！　當り前なら眞裸にして尻の毛までも數へるのだけど、お前は男らしいから赦してやる。片附けろ！

此の上檢べても春畵か女郎屋の勘定書が出て來る位がオチだらう、はゝはは。

電燈工夫、片ッ端から元通りに收ひかゝる。

其筋の一。それにしてもそれだけの小使をパラで捻ぢ込んでゐるのは好い氣ッ腑だ。大きな奴を屁つてポケッに風穴を開けると落つこちして了ふぜ！　はゝはは。

電燈工夫、漸く收ひ終へて悠然と椅子に掛けエアシップに火を點ける。

電燈工夫。面倒ですなァ此處は？　大杉つてあの家よりも此の小屋の方が餘ッ程おつかないや、へゝふふ。

（それを聞きとがめて障子の中から其筋の四の聲。）

其筋の四。何を減らず口を叩ゐてるのか？　眞裸にして貰ひたいのか？（間）。然し他所へ行つて減多のことを喋舌ると赦さんぞ！

電燈工夫。えゝえゝ、それやもう——ふゝふふふ。

突然、其筋の二が突つ起つて頓狂に叫ぶ。

其筋の二。呀ッ！　部長殿！　大杉が出て來ましたぜ！　門口に立つて笑つてゐますよ。

皆、一勢に街道の方へ眼を聳てる。

其筋の四。さうか！　今起るよ！　奴獨りかね？

其筋の二。え、、獨りです。可厭に此方を向ひて笑つてゐますよ。屹度、お客が歸る先振れなんでせう。(間)。それから、おい！　さうだ！　電燈屋！　お前は早くこの北窓を飛び出して裏の畦道を向ふへ拔けろ！　此の小屋に這入つて俺達と斯て話してゐる所を大杉に見つかると此の次お前が彼の家に行つた時には甚い目に逢ふぜ！　早く逃げろ！　呀ッ！　未だうし笑つて此方を見てるァ！

電燈工夫。なァに、もう見つかつたんですから逃げるにや及びませんや。私の方から行つて大杉の顏を熟く見覺えて置きませう！

鼠色の合服を着けた其筋の四、漸く障子を開けて敷居に腰を下ろし靴を履きながら——

其筋の四。厄介な奴だなァ。此奴は！　早く出ろ！　それから君等は出動準備をしておいて呉れ給へ！　E夫婦が歸るのだらう？　僕が行つて聞いてみるから、合圖をしたら直ぐ來てくれ給へ！

電燈工夫。ぢやァ私ももう歸りませう。一緒にお伴しませう、其處まで。

其筋の四。困るなァお前は、離れて知らん顏をして歩け！

電燈工夫。好いぢやないですか？　そんなに嫌はなくつても、ふゝふふふ。

其筋の四と電燈工夫は前後して畔道傳ひに街道へ出る。

門の内外

門の敷石の上に大杉が褞袍のまゝニヤ〳〵笑ひながら突つ立つてゐる。其筋の四、近寄つて鳥打帽子を脱ぎ可厭々々ながら輕く低頭をする。電燈工夫、其筋の四の後に肩越しにセヽラ笑つて立つてゐる。

其筋の四。お出かけです？

大杉。あァ。

其筋の四。Eさん達も御一緒ですか？

大杉。否や！　俺一人だ！

其筋の四。何處までゞすか？

大杉。此處までさ！

其筋の四。御冗談でしやう。Eさん達は未だお歸りにはなりませんか？　(間)。櫻は盛りですねえ。

大杉。さうさ。氣晴らしに一寸此處まで櫻を見に出て來たのさァ。それから君の後に隱れてゐるその電燈屋さんを見に來たのさァ。はゝひゝふふ。

其筋の四。急に後を振り向ひて威張つた横幕で睨みつける。

其筋の四。こらッ！　貴樣は未だ其所に居たのか？　早く歸れ！　他人の顏をそんなにジロ〳〵凝視めるもんぢやない！　失禮ぢやないか？　あゝん！

電燈工夫は一足大きく飛び下つて、瞬間、大杉の面上に鋭い決斷の一瞥を注ぐ、大杉も刹那、同じ眼色を電燈工夫に送る。其筋の四　キヨロキヨロする。

電燈工夫。え、、お邪魔しました。では左樣なら！

電燈工夫は自分の聲に飛ばされた樣に停車場の方へ急ぎ消える。隧道を潜り拔けた上り列車の汽笛がケタタマシク響いて來る。大杉は首を傾しけながら。

大杉。あの電燈屋はどうも君等の間諜に相違ない。Mが餘り怪しかつた〳〵つて云ふもんだから、俺も化物の正體を確めておきたいと思つて出て來たのだ。あんなものを寄越すなんて君等は卑怯過ぎるよ！　はゝひゝふ。

其筋の四。そんなことはありませんよ！　私等の方でも彼奴の身體檢査をして位ですものオ。

大杉。それや君等の勝手さ！　兎に角、あの電燈屋が僕の家を出ると直ぐ呼び込まれもしないのに君等の小屋に這入つて行つたのを僕はこの目でちやんと見屆けておいたんだからね。それでも君等はそんなことはないと言ひ張るのかね？

其筋の四。否や！　私達の間諜だなんて全くそんなことはありませんよ。そんな誤解をされちや困りますなァ。

大杉。困るやうな事を誰が仕出かしたんだ？　自分で仕出かしておいて困りますもないもんだ！　はゝひゝふ、ふふ。

其筋の四。彼奴！　飛んだ飛ッ沫りを殘して往きやがつた畜生！。

大杉。あの電燈屋も屹度今頃そんな空々しいことを呟いてゐるこつだらう。何にしても間諜の首實檢だけは確かに出來得て僕も此所まで出て來た甲斐はあつたよ！　はゝひゝふふ。

其筋の四。それやさうと一體Eさん達は何時頃お立ちなんですか？

大杉。さうだなァ。外はお祭り騒ぎで、汽車も電車も混むから夜船を下ろしてKへ歸るやうなことを云つてるぜ！　海ではまさか提灯行列でもあるまいからつて。(間)。ここによつたら僕等も送り狼になるかも知れぬ。それはさうと沖は靜からしいが夜潮の工合は如何かなァ？

其筋の四。さうですか？　それや痛快ですね。お伴しませう。船も庸つて置きませう。そして誰かに潮工合を視に遣りませう

其筋の四、獨り合點して急いで小屋へ引上げる。大杉は其の背へ投げつける樣に而も氣のない調子で。

大杉。君等の都合合い、やうにしたらい、だらう！

大杉は踵を返して何事か考へながら支關の方へ歩を運ぶ、二三歩進むと突然、感電したやうに鋭く短い身顫ひをして、彼は飛び石の上に足を止め、軈て泰然と瞳を凝らし櫻の木を看上げてゐる。上り列車が徐行する。輕い動搖を彼の足下に送つて來る。花片がたつた一つ彼の左肩へ散りかゝる。披は恍惚狀態に浸りながら。

大杉。汽車は往くゥ。花は散るゥ。日が暮れるゥ。

黄昏るゝ金色のまぶしい天を仰いで全く無意識に爆烈的な中音聲——

大杉。孰方途！　石か黑パンかだ！

同時に前に昏倒しやうとする。危く櫻の大木に双手を支へる。花瓣が一度にパラ〳〵と降る。彼の頭上や兩肩は時ならぬ薄桃色の眞綿を覆つた樣。その儘、三秒——五秒——十秒——パン！　パン！　パン！　濱邊に花火が昂る。應接室の窓から鋭く洩れて來る泣き出しさうな魔子の叫び聲、姿は見えない。

魔子の聲。パパァ何處へ行たのォ？　パパァ！　早くお出でよ！

大杉は、はつと我に返つて彈かれた樣。櫻の木から跳ねのいて頭や肩の花瓣を拂ひつゝ彈丸のやうに開け放たれた支關の色臺に飛び上る。振り返つた彼の最後の一瞥は、愛と自由のプリズムの如く尊い耀きを放射する。緊張し切つた蒼黑い顏に沈毅な底深い笑みを湛へて——靜かに黑幕を下ろすと同時に舞臺も觀客席も一時に消燈、暗黑の儘四分間。軈て四秒毎に黑幕内の電燈一個宛點燈する。舞臺が全く明るくなつて初めて一勢に觀客席に點燈する。黑幕靜かに上がる　舞臺全く空虛　(了)。

——一九二五、八、三一——

附記

僕は今、叙事詩、感想文、小説、戯曲の四體を驅りて『僕の自叙傳』の完成に急いでゐる。これはその一節だ。而して大杉の半面の實寫だ殘る彼の半面は此の姉妹篇として『大杉と刺客』が雜誌『組台運動』紙上に同時に發表されてゐる筈である。二篇併せても尙、彼の一面の描寫に過ぎない。彼は實に多面體であつた。而も幸が不幸か『僕の自叙傳』裡に在つて彼は可成り重要な役割を演じてくれてゐる。故に今後、機會ある毎に、又、發表の自由を得られる限り、彼の『自叙傳』の補追を成すつもりでヌタクル。

讀者諸君！　判讀了得されれば幸である。これ等は全て禁轉載、禁無斷興行。　然しこんな偉きうな誤託を列べても今の僕には一寸先も判らないのである。多分全ては成る樣に成るであらう——。

以上。

三年前

大崎和三郎

女が
子供が
？
？
？
目の
壁の影は
大きなやさしい男
青ざめてブルブル
？
フルエティル男
？
アハヽ
されてゐる

一九二五、八二